京都・鳥羽離宮跡

1 所在地　京都市伏見区竹田浄菩提院町・竹田内畑町・田中殿町

2 調査期間　一　一九七六年（昭51）一一月～一九七七年三月
二　一九七九年（昭54）一二月～一九八〇年四月
三　一九八七年（昭62）七月～九月
四　一九九二年（平4）一〇月～一一月

3 発掘機関　㈶京都市埋蔵文化財研究所

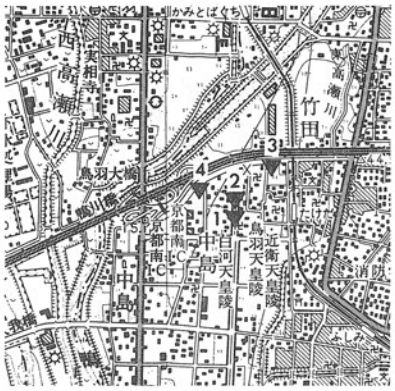
4 調査担当者　磯辺　勝・会下和宏・加納敬二・鈴木久男・長宗繁一・前田義明

5 遺跡の種類　離宮跡

6 遺跡の年代　平安時代後期～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

鳥羽離宮跡は、京都市南の郊外、現在の名神高速道路京都南インターチェンジの南方一帯に位置する。



（京都東南部・京都西南部）

応徳三年（一〇八六）、白河天皇が、退位後の離宮として造営したのが最初で、その後も次々に拡大された。

離宮は、南殿、北殿、泉殿、東殿、田中殿、馬場殿からなり、それぞれの御所には証金剛院、勝光明院、成菩提院、安楽寿院、金剛心院といった御堂が付随した。後述する東殿、田中殿に関しては、東殿が嘉承三年（一一〇八）に、田中殿は仁平二年（一一五二）に造営されたことが記録に残っている。

この離宮は、一四世紀頃まで使われていたが、その後、大部分は廃絶し、現在では、白河天皇陵、鳥羽天皇陵、近衛天皇陵、及び近世に再興された安楽寿院や北向不動、城南宮などがその姿を留めるのみである。

以前出土した本誌未掲載分も含めて報告する。

一　第二一次調査（東殿）

調査地は東殿推定地である。調査の結果、建物、溝、土坑などを検出した。

建物は、根石及び礎石からなるが、調査区外に展開するため全貌は明らかでない。同一遺構面の土坑より出土した土師器類からみて、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて築造されたと考えられる。

溝は、南北方向に走るSD二、及びこれを切って東西方向に走る幅約三mのSD一Bがある。SD二は、平安時代末期から鎌倉時

代にかけて、ＳＤ一Ｂは鎌倉時代と室町時代の二時期に区分できる。

木簡は、ＳＤ一Ｂから、四点が出土した。伴出遺物には、曲物、漆器、仏像などがある。

二　第五四次調査（東殿）

調査地は東殿推定地にあたり、前述した第二一次調査地の北隣にあたる。周辺の調査では、東隣の第三五次調査において平安時代末期から江戸時代に至る遺構を検出している。特に東西に走る幅六ｍ以上の堀状の遺構から、多量の土器片とともに、木製品、金属製品が出土している。

調査の結果、平安時代末期から江戸時代にかけての土坑、井戸、溝などを検出した。また、前述した東西方向の堀の延長部にあたるＳＤ一〇、及びこれに交差して南北に走る堀ＳＤ七も検出した。時期的には、出土遺物から鎌倉時代には確実に造られており、江戸時代においてもくぼみ状に残っていたことが判明した。これらの堀は、前述の第二一次調査や第三五次調査において検出された溝や堀と一連の遺構であると考えられる。

木簡はＳＤ一〇から、多量の木製品とともに、六点が出土し、平安時代末期から江戸時代前半のものと考えられる。その他、ＳＤ七から、仏像や人形とみられる木製品が出土している。

三　第一二四次調査（東殿）

調査地は、東殿北東部にあたる。周辺の調査では、第二九次調査において柱穴群及び井戸を重複した状態で検出している。このようなことから当地域は雑舎的な性格を有した建物があった地区と推定している。

調査の結果、鳥羽離宮期の井戸、土坑、溝などを検出した。

木簡は、南北溝ＳＤ二八から、多量の完形土器、木製品とともに、三四点が出土しており、一二世紀後半のものと考えられる。

四　第一三八次調査（田中殿）

調査地は、田中殿跡地と推定される。周辺の調査では、建物、建物基壇の地業、地鎮具などが確認されており、本調査においてもこうした遺構の検出が予想された。

調査の結果、建物基壇の地業を検出した。地業は玉石を敷きつめた層と粘土層の互層により版築され、層厚七五～九〇㎝にも及ぶ。

木簡は、地業最下層、地山より一〇㎝上のシルト層内において、文字の書かれた面が下になった状態で出土した。

8　木簡の釈文・内容

一　第二一次調査（東殿）

(1)　・「ち諸神□□守所也。」

・「き　　○」　　135×21×1　061

(2)
・□　中陰四十九日中造立□
　□□　　」　(297)×53×4　061

(3)
「〈南無阿弥陀仏○」　141×18×2　061

(4)
・「□□性覚□位　　」
・「應永五年十月廿五日」　273×55×4　061

(1)(2)(3)は卒塔婆、(4)は位牌である。

(1)は上端部が圭頭形、下端部に穿孔がある。一文字目は梵字で、表は「カ」と読み地蔵菩薩を指す。裏は「バン」と読み大日如来を指す。(2)は上端部が折損し、下端部が尖る。(3)は上端部が圭頭形、上部左右両側面の三箇所に切り込みが入り、下部には穿孔がある。(4)は上端部が圭頭形、下端部は両側面が切り取られ方形の突起状になる。

二　第五四次調査（東殿）

(1)
・「〈南無阿弥陀仏　　」
・「〈　　慶長十三年

〔慈カ〕□久西童子　□□
七月三日　日　　」　395×57×1　061

(2)
「〈南無×　(92)×25×3　061

(3)
「〈□南無×　(89)×26×3　061

(4)
「荇川二丈一尺」　514×47×2.5　051

(5)
「鳥羽二丈一尺　(248)×45×3　019

(1)は上部の左右両側面四箇所に切り込みが入る。裏面上半五文字は梵字で「キャ・カ・ラ・バ・ア」と読み、地水火空風を指す。(2)は上部左右両側面二箇所に切り込みが入り、下部は折損する。(3)も(2)と同様に上部左右両側面二箇所に切り込みが入り、下部は折損する。

(4)は上端部が圭頭形、下端部は尖り、墨書の残り具合も非常に良い。「荇」にはセリの古訓があり、「芹」に通ずる。(5)は下部を欠損するが、上端部が圭頭形を呈し、(4)と同じ形態になる可能性が強い。

(4)

(5)

釈文については、下半の四文字が(4)(5)とも「二丈一尺」と共通しており、筆跡も同質である。

(1)(2)(3)は卒塔婆、(4)(5)は用途が不明であるが、両者の共通性から同一の性格を有していたものと考えられる。

三　第一二四次調査（東殿）

(1)　□十一斤□。　十一斤置　日甲乙丙丁戊□〔己カ〕日□　(140)×22×4.5　081

(2)　「〈□第三□」　17×10×2　061

(1)は両端部を折損し、中央部に穿孔がある。(2)はこけら経である。上端部に削りだしによる小突起があり、その下部左右側面には切り込みが入る。下端部は尖る。

なお、その他の出土木簡については、『木簡研究』一〇において報告している。本稿では、整理の過程で新たに判読出来たもののみを報告した。

四　第一三八次調査（田中殿）

(1)　「讃□国五十　×　」　(391+84)×44×6　051

上端部が圭頭形、途中下部の一部を欠損するが、下端部のみ残存し、尖る。墨書の剥落がひどく、文字の細部については判然としない。前半の三文字は「讃岐国」であろうか。文字の下部に付された「×」印は記号的なものと考えられるが意味は不明である。

出土状況からこの木簡が田中殿の地業に関連するものと考えて良さそうであるが、讃岐国との関わりにおいて、どの様な意味を有しているのか、現時点では不明である。

なお、木簡の釈読については、奈良国立文化財研究所の橋本義則氏のご教示を得た。

9　関係文献

㈶京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡　区画整理道路予定地内発掘調査概要　昭和五一年度』（一九七六年）
同『鳥羽離宮跡　区画整理道路予定地内発掘調査概要　昭和五四年度』（一九八一年）
同『増補改編　鳥羽離宮跡』（一九八四年）
京都市文化観光局・㈶京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和六二年度』（一九八八年）
鈴木久男・前田義明「京都・鳥羽離宮跡」（『木簡研究』一〇　一九八八年）

（会下和宏）